

生きる第一歩と音楽の力

菅原峰子

The first step in life and the power of having Music

Mineko Sugawara

豊岡短期大学 論集

第 15 号 別冊

平成 31 年 3 月 31 日 発行

生きる第一歩と音楽の力

The first step in life and the power of having Music

菅原 峰子

Mineko Sugawara

第1章 生きる第一歩と音楽の力との出会い

第1節 音楽との出会い

人はこの世に生を受け産まれてから、人生100年と言われる現代において、約1世紀近くを生き終えるまでにどれだけの音や音楽に出会うだろうか？ どれだけの曲を歌うだろうか？

この世に産まれた赤ちゃんの第一声の産ぶ声、ここが既に歌を歌う為の声の第一歩なのである。

幼児は首が座り、足や手をバタバタさせ、物をつかめる様になり、寝返りやハイハイ、つかまり立ち、そして歩ける様になる様に、今まで出来なかった事が出来る様に著しい発達を遂げる体の発達と共に、周りの大人の話す言葉や表情を真似ながら単語を覚え言葉を習得し、自然と耳に入ってくる音楽やリズムをも体で受け止めて行く。

歩ける様になると外に出て初めて見る世界。風の音や雨の音、身近にある草や花、動物、虫などに触れ、家の中では見た事の無い様々な物との出会いに感動する。四季折々の自然に伴う音、自然の中にある音から素直に感じ、驚き、様々な新しい発見をする。初めて出会う全てのものに感動し目をキラキラと輝かせ成長していく。

その場面場面において多くの音楽に出会い沢山の歌を聴き、それを声にして歌い、自分の中にある感情を外へ表現する。言葉をまだ完全に習得していない2歳前後の子どもでさえ、まだまだ歌とは言えない言葉の延長の様な歌ではあるが、その子なりに、感じた喜びを小さな身体で精一杯、表現している。

正に、これこそが「生きる第一歩と音楽との出会い」である。

第2節 音楽との出会いにおける母親と周りの大人・保育者の役割

この大事な音楽とのスタートの時期に周りにいる母親は勿論、大人の役割は多大と考える。子どもその感動を、共にその都度一緒に喜び、感動を分かち合い歌う事がとても大事と考える。

何故なら、音楽は、子ども達がこれから歩いていく長い人生において、常に傍らで喜びや悲しみ、苦しみを支えてくれる存在となり得るからである。この段階で音楽を素直な心で体の中に受け入れる

事は、その後の人生にとって必ずやプラスになると考える。

第3節 乳幼児期の歌う活動・音楽活動の具体的事例

ここで歌う活動を考えてみる。子どもはかなり小さい段階でも、歌らしきものは歌うことが出来るが、ある日突然、周りの歌っていた曲やテレビなどから日常的に聞こえてくる曲をほぼ正確に歌えるようになる。

1歳7ヶ月のA子ちゃん(あーかいべべきたかわいいきーんぎょお目目を覚ませべ(?)ごちそーするじょお)

ところどころ歌詞は違っていても1番2番全てを歌いきった。

「きーんぎょ」の所の八分音符も八分休符も見事に捉えている！音符の長さリズムもほぼ正確。その後は、言葉と同様曲数は次々と増えていく。テレビのアニメの挿入歌などかなり難しくても最後まで歌い切る。3歳近くになると周りのおもちゃをパーカッションがわりに使いながらお気に入りの「うれしいひな祭り」「こいのぼり」を披露する。

自分の歌を更に素敵にしてくれる効果音にも大満足。それを見ていたお兄ちゃんも即座にオモチャのパーカッションを見つけて歌い出す。テンポはドンドン速くなり、そこに踊りも加わり大騒ぎ。歌、伴奏楽器(オモチャを使ったパーカッション)、踊りと、ここには1つの音楽表現が立派に完成している。

歌う事が楽しくなったら、次は子ども同士のコミュニケーション。まだまだ未熟な言葉を補うかの様に短い曲を次々と作曲しコミュニケーション手段として使います。

「おは よ。あそびましょ」

「いいよ あそぼ」

正に子どもは作曲家である。

第4節 音楽の楽しさを持ち続けることの大切さと音楽の力

幼児教育の重要性や幼児教育と音楽の重要性について多くの方々が多様な形で発信している。

しかし幼児教育のみで良いのだろうか？

専門学校生、並びに現在保育者として働いている先生方にアンケートを取った結果、小学校の音楽の授業は楽しかったとの回答を得た。

しかし、中学、高校(高校は選択授業だが専門学校生、もしくは現保育者は大体音楽を取っている)へ進むにつれ、学校の音楽授業の楽しさが薄れていってしまっている結果となった。

音楽の第一歩を踏み出した幼児が、出会った音や音楽に素直に感動し、喜びと嬉しさを持って、身体全体で、生き生きと表現するように、小学校の児童達にも音楽の楽しさを持ち続けて貰い、さらに、中学・高校へと進む過程においても、音楽の楽しさを持ち続けて貰うには、どうしたらよいか、と考

える。その後、成人期・高齢期と、赤ちゃんからお年寄りまで、長い人生の中で、様々な音と音楽と出会い、「音楽の力」に支えられながら、夫々の人生を心豊かに生きていくと考える時、生涯通して音楽の楽しさを持ち続けることが如何に大切かが分かるのである。

音楽に、歌に満たされて育つことは、その後の人間形成に大きな影響を与えると考えるからである。

人は歌いながら笑ったり泣いたりする。しかし、怒って歌っている人には、あまり出会った事が無い。小さな子どもから、やがて人生を終えようとする年代の人達まで、笑顔で歌って幸せを感じ、静かに歌って涙し、思い出の曲を聴きながら癒される、これが「音楽の力」だ。

第5節 高齢期の歌う活動の具体的事例

誰もが生きて行く中に思い出の曲を持っていると思う。本人が無意識のうちにもそれは存在すると思う。80年をとくに過ぎる人生を歩んで来たある女性が、ふと無意識のうちに「故郷の空」を口ずさんでいた。(夕空晴れて 秋風吹き 月影落ちて …)

途切れ途切れではあるが、歌詞もしっかりと歌い終えた。その曲に秘められたバックグラウンドと共に彼女の大切な歌なのだろう。これは、私に関わる音楽療法の現場ではよく見かける光景だ。

第6節 音楽療法的なアプローチで考える音楽の力について

音楽療法の一般的定義は、先ず、対象者(クライアント)を理解する事から始まる。音楽療法では、クライアントに対し、音楽を表現手段として使いながら、人間的成長へと導く過程において、音楽を使用する事で、クライアントの生命(生活 Life)に意味のある貢献をすると考えられている。

幼児教育に置き換えると、音楽により子どもの発達に関わりながら、子どもの心を育むという事は、音楽療法とある意味同じことのように思える。それこそが、「音楽の力」そのものと言えるからである。

こうして人はこの世に生を受けてから終末を迎えるまで、「音楽の力」に助けられて生きていくと考える。

歌う事、音楽を聴く事、踊る(子どもが表現する)事、イコール生きる事。その第一歩を子どもは踏み出し、長い人生に出会う色々な音と共に歩いて行く。

それでは、どうすれば音(音楽)に包まれた環境を維持出来るのだろうか？

第2章 音楽の力とともに生きていく

第1節 産まれる前の音楽活動

よく胎教という言葉に耳にする。これは、妊婦が精神の安定に努めて、胎児に良い影響を与えようとする事であり、胎内教育とも言う。

赤ちゃんに、産まれる前から良い音楽を聴かせて母親も一緒に音楽に触れる事。お腹の赤ちゃんは、素晴らしいスタートを切るのだが、産まれた後、母親は、初めての子育てに追われ、心も身体も疲れ

果てそれどころではない現実と出会ってしまう。3時間毎に起こされ、母子共に昼間も夜も中々寝むれない。赤ちゃん誕生から数ヶ月の間は音楽どころではない。

ところがこの間も赤ちゃんは音のする方へ顔を向けるなどして、母親の声、周りの声や音などに対して、身体で反応していると言われている。赤ちゃんの聴覚は日に日に研ぎ澄まされて行く。

第2節 乳幼児期の音楽活動

胎教からの音の継続こそがその子のその後の人生に重要ではないだろうか。ちょっとした瞬間に母親が歌を口ずさむとか、5分でも赤ちゃんと一緒に音楽を聴いてみるとか、とにかく継続が大事である。

子どもは人としての大きな身体の成長を遂げる頃まで、心の成長も育まれると考える。「三つ子の魂百まで」成長段階で最も重要な時期なのだ。そこで「生きる第一歩と音楽の力」この時期、つまり幼児教育こそがその子の一生を左右すると言っても過言ではない。

胎教からスタートした音楽(音)との出会いをいかに継続出来るか、小学校へ上がっても音楽の素晴らしさ、歌う事の素晴らしさ、楽しさを実感出来る事が理想である。

第3節 小学校学齢期の音楽活動

小学校へ上がる頃になると幼児の頃に比べ身体も一気に成長する。声域もかなり広がり様々な曲を歌えるようになる。しかし本格的な歌のトレーニングを始めるには、まだまだ身体も声帯も不完全である。

第4節 中学校学齢期の音楽活動

一般的に、中学3年生頃から大人の声へのトレーニングに耐えられる身体となると考える。ピアノ等のコンクールを見てみるとかなり小さい頃から才能を発揮する場合が見受けられるが、歌の場合、そもそも高校生以下の出場出来る声楽コンクールはかなり少ないのが現実だ。この事からもわかるように、歌は身体が楽器である為、小さい頃からの無理な発声による歌は大変危険である。小学校、中学校までの子どもには、無理なく素直な声での歌の指導が一番重要だ。無理に大きな声で歌うのではなく先ず身体作り、そして息の吸い方、吐き方(腹式呼吸)を丁寧に教えて、素直な自然な声で歌える為の歌唱指導が望ましい。この時期に一番大切な事は、歌う事が好きになる事、歌を、音楽を嫌いにならない事が最重要と考える。

第5節 高校学齢期の音楽活動

高校生になると、ほぼ身体も出来上がり大人と同じトレーニングが可能になって来る為、そこまでに歌う基礎、身体作り、音楽の楽しさをしっかりと身につけておくと、ここからの人生において音楽

というものが大きな力となっていくと思う。考え方もぐっと大人になるこの頃、音楽の感じ方も一気に成長する。音楽と共に楽しんだり、音楽によって癒されたり、音楽を聴いて涙したり、と生活の中に音楽が完全に溶け込んで来る。但し、子どもの頃からの音楽環境で、その感じ方はかなりの差が出てくると考える。

第6節 成人期から高齢期の音楽活動

成人年齢になる頃から70代位まで能動的な音楽生活となって来るように思う。そして人生の晩年へと向かいながら受動的音楽生活へと変化し始める。何でも元気に出来た時代を経て、だんだん身体ということが効かなくなる。動くことも歌う事もそれまでよりは一気に減少する。しかし、幼い頃と同じく、聴く能力は他の能力より依然として優れていると考えるが、更に言うなら、その場合、単にフィジカルな聴力で聴く力だけではなく、人生を重ねて培われた「心で静かに深く聴く力」に支えられて、晩年の聴力がより研ぎ澄まされていくものと考え。長い人生の中で数限りない音楽との出会いがあり、音楽によって嬉しい気持ちになったり、悲しい気持ちになったり、癒され満ちたりたりと音楽での力に助けられてきたからである。

第7節 音楽の力とともに生きていく

このように人は産まれてから、人生を終えるまでの長い時間を、多くの音、音楽と出会い、音楽に浸り、それぞれの年代で、その都度感じ、それを表現しながら、「音楽の力」と共に生きていく。

このことは、「音楽は音による芸術」と言われるとともに、「音楽は時間の芸術」とも言われるように、「その人にとっての音楽は、その人がその時間にそのシチュエーションの中で唯一無比実体験し感動したもの」であり、それが心に残るとともに、「その人の人格形成に大きく関って一生離れない生きる力」となっているということではないだろうか。

第3章 「保育者にとって音楽とは」のアンケート分析と「音楽の力」についての考察

平成30年5月に、「保育者にとって音楽とは」のテーマで、保育者を目指す専門学校生40人と現在保育に関わっている6つの幼稚園の先生33人の合計73人にアンケートをとった。このアンケートを、1つずつ分析しながら、論文の主題である「生きる第一歩と音楽の力」について考察する。

第1節 「何故保育士を志したか」の質問に対して(図1参照)

「子どもが好きだから」「子どもと関る仕事がしたいから」「子どもの成長を傍でサポートしたいから」「子どもの成長に遣り甲斐を感じるから」と答えた人が、全体の57人78%で、何となくといった曖昧な気持ちではなく、「子どもが好きで子どもとの関りに保育士としての夢と希望と使命をしつ

かりと持っている」事がアンケートから強く感じた。子どもたちがこの世に大切な命を授かり、命の営みをスタートさせる第一歩として、乳幼児期に、最初に出会い最初に得る学びの対象として、母親とともに保育者がいることを考えたとき、保育者の乳幼児への関り方が如何に大切かが分かると思う。「生きる第一歩」となる乳幼児期に関った保育者によって乳幼児の一生を支える生きる基盤の一つが作られると考えると、保育者の教育者としての使命と責任は重大であり、命を預かる相当な覚悟が必要と考えるが、アンケートに答えた殆どの保育関係者が、「子どもが大好きで真摯に子どもと向き合っていて保育士の仕事を捉えている」ことについて嬉しくもあり大きな期待と希望を持ったところである。

第2節 「保育者にとって音楽とは何ですか」の質問に対して (図2参照)

「子どもとのコミュニケーションツールであり子どもとつながる重要なツール」と3割が答え、「ピアノ・歌・手遊び等を通して楽しみながら一緒に学べるもの」が2割、「子どもの感性や想像力・発想力を豊かにし、心豊かな人間性を引き出すもので、子どもの成長に欠かせないもの」が2割で、このことから「生きる第一歩」の乳幼児期において、「音楽」によって、乳幼児と保育者とが一つとなり、一体となって、共に学び、共に成長していつているのが読み取れる。

第3節 「幼児教育にとっての音楽の必要性について」の質問に対して (図3参照)

全員が「幼児教育にとって音楽はなくてはならないもの、必要不可欠なもの」と答えており、その理由として、「音楽によって表現力・創造力・発想力が育ち、心豊かになり、感性豊かになる」と答えたのが全体の3割である。正に、一生を通して養われていくべき人として大事な能力のベースがこの幼児期に培われていくことをアンケートは如実に示している。

次に、「音楽がコミュニケーションツールとなって友達や先生と心触れ合い、心一つとなり、仲間意識が育ち、結果として、協調性・集団性が身に付き、情緒も安定する」と答えたのが、2割強である。このことは、「音楽によって人とつながり、安心・安定した気持ちになり、情緒が安定する」という事を言っており、正に、人が「生きるベクトル」として「究極的に求めているもの」、即ち、「心の安定・平和」をいみじくもアンケートによって言い表しているのではないかと考える。

次に、「音楽によって、また、音楽とともにダンスや踊りで体を動かすことで音感やリズム感を養う」が2割で、「音楽は単に聴く力だけではなく、身体全体のあらゆる力を育てていく源となっている」のがアンケートから読み取れる。

更にもう一つとても大事な回答として、「幼児期に音楽に触れ、音楽とともに遊ぶ中で、言葉が増え、言語が発達し、思考力も養われ、心身ともに成長する」が1割で、このことから、「音楽を通して感性だけではなく知性をも刺激し広く人としての成長が促されていること」が読み取れる。

この質問項目への回答内容全体から読み取れることは、「幼児期の音楽教育が、子どもの人格形成と持っている能力を引き出す事に、如何に大きな影響を与えているか」ということである。

第4節 「学校教育での音楽授業について」の質問に対して(図4参照)

「音楽の授業は楽しかったですか」の質問に対して、「小学校の音楽の授業」は、全体の58人、79%の人が、「中学校の音楽の授業」は、47人、64%の人が、「高校の音楽の授業」は、34人、46%の人が、「楽しかった」と答えている。「楽しかった理由」として、中学校では、46%の人が、「皆と楽しく歌った合唱」「合唱コンクールでクラスが一つにまとまったこと」を挙げており、小学校・高校では、夫々、49%・42%の人が、「ピアノやギター・ハーモニカ・琴・太鼓等、様々な楽器に触れたことが新鮮で印象的」と答えている。このアンケート結果から読み取れることは、幼児教育に携わる保育者の多くが、「学校の音楽授業が楽しかった」と答えており、「音楽の楽しさを自分の体験とともに子どもたちに伝えて貰える」ことに、今後の幼児教育における音楽教育の明るい未来を感じた。また、その理由が「合唱を通して皆と心一つになれたこと」「初めて出会う楽器の音色に新鮮な感動を覚えたこと」を挙げており、このことは、「音楽には、育ちや能力や性格などあらゆる面において多様な子どもたちを心一つにする夢のような魔法の仕掛けがある。それこそが、音楽の持つ奥深い不変の魅力」と言えるのではないか。また、初めて出会う楽器を通して、「生涯忘れられない音の魅力・新鮮な音の感動」を身をもって体験していることがアンケート結果からも読み取れ、この感動を保育者が幼児期の音楽教育の中で子どもたちに伝え、感動を共有することで、心豊かな人間性が生まれていくものと考えられる。

第5節 「あなたにとって音楽とは何ですか」の質問に対して

「気持ちが落ち着く」「心が癒される」「元気を貰う」「楽しくなる」「心穏やかになる」「自分の気持ちを表現するもの」といった内容のものが回答として多くあった。このことは、たとえ人と人との間には如何なる差異や争い事があるとしても、「音楽によって心が平らかになる」の一点において、つまり、音楽の持つ魅力・魔力によって、「全ての人が共通の安心と安定を得ている」ことが分かる。人が生きていくうえで、求め続けて止まない目指すものは、正に、この「持続する安心と安定」ではないだろうか。その大事な課題に「音楽」が「答えそのもの」として「自分の存在の意義」を明らかにしている。

第6節 「保育者としてどのような音楽教育をして来ましたか。反省はありますか」の質問に対して

「心から楽しんで音楽に触れられるように指導してきたかは日々反省である」「教え込むばかりで自由な表現が足りなかった」「リズムを正確に、歌詞を正しくなど、こちらが一方向的に求めるものを前面に出し過ぎて、音楽を楽しむのではなく、教え、やらせ、与えることになっていたのが反省である」との回答が多くあった。

第7節 「今後、保育者として、あなたならどのような音楽教育をしたいですか」の質問に対して

「音楽は楽しい」「音楽は大好き」「音楽は素晴らしい」「いつまでも歌ったり踊ったりしていきたい」と素直に思ってもらえるような、つまり、「心を縛る」ものではなく、「心を解き放つ自由で楽しくなる」音楽教育をしたいとの答えが多くあった。

この関連した2つの質問へのアンケートへの答えから、読み取れることは、「音楽を楽しむ」とは、「音楽の本質に触れて初めて味わえるもの」であり、「その本質」は、「一人一人の心を縛らない、心の自由・発想の自由・表現の自由の延長上にあるもの」であると考えている。「小中高の音楽の授業が楽しくなかった」と答えた人の理由には、「テストのための音楽」、つまり、「心が縛られ、閉ざされている中での音楽との出会い」にあったと考えられる。「音楽を心から楽しむ」ことで、「音楽の本質・真髄に触れる」と考えると、「生きる第一歩となる幼児教育における音楽教育」こそ、「楽しくなる音楽教育」が求められると考える。

具体的には、今後、求めていくべき音楽教育は、「保育者の論理で押し付ける音楽教育」ではなく、「子どもの自由で明るく豊かな発想力」に、保育者が合わせる中で、「共に楽しむ音楽教育」ではないだろうか。その過程において、必ずや、人類に共通の「音楽の本質・真髄」が見えて来るものと考ええる。

第8節 「良い音」「良い音楽」と感じる「音の魅力」「音楽の魅力」についての質問にたいして

「心に沁みる」「涙が出る」「思い出が甦る」「悲しみや苦しみを乗り越えられる」「元気が出る」「嬉しくなる」「楽しくなる」「癒される」「安心する」など、様々な思いで、音や音楽が「その人の心に深く響いている」事がアンケートから読み取れる。このことは、音や音楽は、「その人の人生とともにあり」「その人の人生に寄り添い」「その人の人生を支えている」ことが分かる。正に、「音楽の魅力」そのものと言える。

第9節 「良い音・良い音楽が持っている魔法の仕掛け・秘密の仕掛けは何だと思いますか」の質問に対して

「その音楽を聴くことで、これまで経験したことを思い出させてくれる、幸せな時を思い出させてくれる、幸せな気分になれる」「その音楽を聴くことでその時々感情導入が図られる」との答えが多かった。

第10節 「良い音・良い音楽は人の何に対して何を響かせていると思いますか」の質問に対して

「人の心に対してその人に必要なメッセージを語りかけている」「人の心の壁に触れて本人が気が付いていないものを刺激したり取り出したりして音楽と心のハーモニーを作り出し心や魂に深く響

かせている」「人の心の琴線に触れる命の振動を響かせている」「人の生きている今に対して命の鼓動を響かせている」との答えがあり、正に、「音楽の持っている力の本質や真髄」に迫る真摯な回答を頂いた。

この関連した2つのアンケートへの答えから読み取れることは、乳幼児期から高齢期まで、人の人生全体に大きく深く関って影響を与えている「音楽の力」、即ち、時々生きる道しるべを指し示してくれる「音楽の力」とは何かを、保育者自らが、日々の実生活での音楽活動の体験を通して、アンケートの中で、如実に表現してくれていると考える。

以上が、「保育者にとって音楽とは」のアンケート分析からの考察結果である。

第4章 「生きる第一歩と音楽の力」とは何か

このテーマに沿って、「幼児教育の音楽教育で一番大切に考えなければならないこと」について考察する。

先のアンケートの中で、「保育者にとって音楽とは何ですか」と投げかけた所、①子どもと繋がる重要なツール②ピアノや歌、手遊びで子どもと一体となる事の嬉しさや楽しさを感じるもの③子どもの成長に欠かせないものなどの回答を得た。

「音楽」を、「子どもと繋がる重要なツール」と捉えているということは、「間違ったツールの使い方ではなく、正しい使い方が求められる」ことであり、「ピアノや手遊びや歌で子どもと一体となる事の嬉しさや楽しさを感じるもの」ならば、「保育者ばかりではなく、子ども達にとっても嬉しさや楽しさを感じるもの」でなければならない。両者共、音楽との関わり方が尚更重要となってくるだろう。

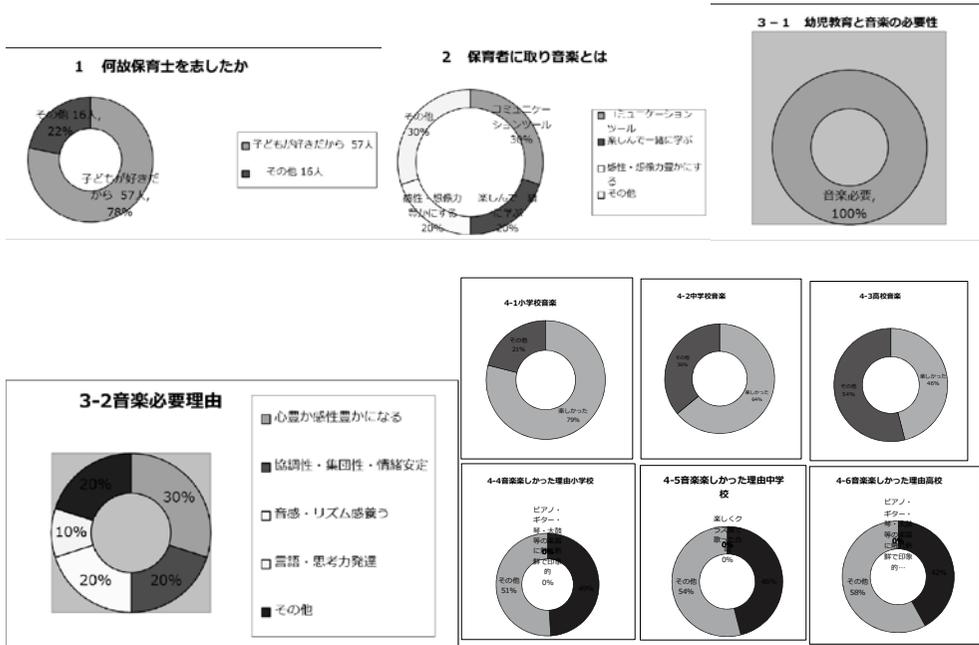
「音楽が子どもの成長に欠かせないもの」との回答からもわかるように、子どもにとっての「生きる第一歩」としての「音楽の第一歩」の大事なこの時期に、子どもと関わる保育者の責任は極めて重要であるという事になる。

ここからスタートする子どもの一生(人生)を左右しかねないからである。子どもの頃に出会った、感じた「音」「音楽」「歌」これを基礎として乳幼児期・児童期から更に成人し大人になっても、その子の人生において出会う喜び、悲しみ、悩みの場面で「音楽の力」で支えられていくと言っても過言ではない。「音楽と共に人生を歩いていく、幸せな人生を歩いて行けるよう」に、「音や音楽との出会いの初めの一歩」が最も重要と考える。

その大事な一歩を、共に歩む尊い仕事を担うのが保育者である。

正に、保育者の仕事は、幼児の「生きる第一歩」である大事な「一生のスタート」を預かるとともに、長い人生のスタートに密接に関り、幼児と関ることで、「音楽の力」と日々真摯に向き合う大切な仕事である。

それこそが、保育者が音楽教育において担っている、「誇るべきミッション」ではないだろうか。



参考文献

馬場一雄(監修)。(1994)。*改訂小児生理学*。へるす出版。

Even Ruud。(1992)。*音楽療法：理論と背景*(村井靖児・訳)。ユリシス出版部。

萩野仁志・後野仁彦。「発声のメカニズム」。音楽之友社。

林 洋一(監修)。(2010)。*史上最強よくわかる発達心理学*。ナツメ社。

今井貴子・畑瞬一郎(2014)。*子どもの心を育む音楽活動～音楽療法からのアプローチ*。東京芸術大学大学院音楽研究科応用音楽学研究室。

石井 玲子(編著)。(2009)。*実践しながら学ぶ子どもの音楽表現*。保育出版社。

岩田靖夫。(2005)。*よく生きる。ちくま新書*。

三浦種敏(1980)。*新刊「聴覚と音声」*。電子情報通信学会編。

齊藤万比古(総編集責任編集)。*子どもの心の診療入門*。中山書店。

繁多 進(監修)(2010)。*新 乳幼児発達心理学：もっと子どもがわかる好きになる*。福村出版。

山内光哉(編)。(1989)。*発達心理学(上)周産・新生児・乳児・幼児・児童期*。ナカニシヤ出版。

アンケート協力

学校法人北斗学園。すみれ文化幼稚園。リリー文化幼稚園。学校法人ならの実学園。桜ヶ丘幼稚園。NPO 法人こどもの森 こどもの森幼保園。祝津保育所。学校法人海星学院。ベネディクト幼稚園。学校法人北斗学園。北海道福祉教育専門学校。